

都留文科大学

地域交流センター通信

Chiiki-Kouryu Center News
2005, March

Vol. **07**

巻頭言 「交流」ということを考える

嶋田鋭二

特集1

学生・留学生たちの居住生活

4

フィールド・ミュージアム

附属図書館ビオトープ

19

16

特集2

卒業論文・修士論文にみる地域研究

20

トピックス

24

「交流」という ことを考える

アカ族へのつきぬ想い

嶋田鋭二



伝統的衣装の正装。今日の日常生活には馴染みにくい

「国際交流」の現実

一九九八年の春先だったと思う。当時タイ北部山岳地帯居住のアカ族の村に入り浸りはじめた学生H氏から国際電話で激しくうったえられた。要点はミャンマー国境のタチレクの街にあるN・G・Oの事務所が売春宿に売られようとしている、それを阻止するには一週間以内に一三〇〇USDが必要！なんとかならないか、ということであつた。この話はアメリカ人のマクドナルド某から持ち込まれたもので、かれは、アカ族の村々を主としてキリスト教の宣教に反対して伝統的な生活を保持するように説いて巡回しているという。危ないとも思ったが、次に述べる二つの枠に入っていないという点でわたしのアンテナにふれるものがあつたので送金した。

アジア「辺地」を歩けばどこでも遭遇する「国際交流」の大きな特徴がある。北側の国家を背景とする（乃至はその出店である）機関が全権をもつてコーディネーター役を果たす援助網と、大小無数のアメリカ系のキリスト教ミッション（布教団体）である。政府や商社などの開発輸入のアンフェア（不公平）さはよく指摘されるが、こちらにも文化的な意味も含めて「フェ

アートレイド（公正な取引）」といいきれないようだ。国家から国家へ、都市から都市への「交流・援助」に関しては、鶴見良行⁽¹⁾氏の指摘などによってくりかえし注意が喚起されている。

キリスト教化と物の流入

たとえばアカ族で見てみよう。中国雲南省を原発地として一〇〇万人以上の人々がミャンマーからベトナムの一〇〇〇メートルレベルに暮らしている。かれらは、おそらく一〇〇〇年以前にわたつて雲南でタイ系の集団に従属しながら暮らしてきたと想像されるが、一切上座部⁽²⁾仏教の影響を拒否している。

ところが現在、アカの村々は大変な勢いでキリスト教化されつつある。アニミズム（精霊崇拜）や偶像崇拜から「自由」になりつつあるようである。それと平行して村々へあたらしい物と金流れ込む。どちらが先でより基本的な要素かは即断できないが、たしかに両者はリンク（連動）している。これを拒否してよりプリミティブ（原始的）な生活をさせるべきだとする

(1) 著書に『バナナと日本人・フィリピン農園と食卓のあいだ』岩波新書、『鶴見良行著作集』みすず書房などがある。

(2) 釈迦の死後、その教義をめぐって仏教教団が分裂したが、そのなかでも、進歩的な大衆部に対し、上座部は保守派とされる（注記・編集長）



現地で交流する都留文科大学の学生たち。この子たちはプロジェクトにより、中学に進学することができた

外部研究者も多い。しかし、自称こちこちのモダニスト（近代主義者）のわたしは反対する。たとえそのような意味でどんなに環境を良くしても、動物園のサル山はそれ以上でも以下でもない。

アカ族の試練

アカの人々が長い時間をかけて作りあげてきた、「無主無従」のエルデ（大地）に引っかけ傷をつけて焼畑を経営し、テリトリー（領地）支配者としていくという、社会の「型」があった。しかし、近代の世界はそれをゆるさない。人々はどこかの国民国家に属

し、第二級でも三級でもその国民として現代社会を生きていかなければならない。

これはよく見かけた風景であるが、国境線が引かれた以上自分の耕地との往来もイミグレーション（入国管理）を通過しなければならぬ。（実際には多くの獣道があつて、農繁期に雲南からタイまで三日がかりで働きに来る人や三つの国籍をもつ人たちもいた。）山岳民証明書では県外への移動と就労は原則禁止されている。よりアッパーな（上位の）身分証明書を獲得するには「国語」の読み書きが要求されるし、地域のヘッドマン（酋長）というボスの推薦が必要。つまりは、学校に行くにも、「袖の下」にも、お金が要る現代社会なのである。どうせ不法就労ならバンコクも甲府のスナックも同じということになる。

子どもたちにとつても状況は変わらない。国民国家が定める六・三制の学歴が要求される。小学課程は多民族を全部あつめた山の学校があつて、ほとんど国語の能力で進級することになっている。しかし、中学の課程は街場にあつてそれぞれの山の村からは通えない。九八年当時、後にわれわれが教育援助プロジェクトをつくりあげたアペ村は、村長のアペさん以下中学卒業者

はいない典型的な少数民族グループとしてあつた。

「近代」の乱入を日常生活のレベルでみてみよう。山に火を入れたら刑務所行きであるから大部分の米を現金で購入しなければならぬ。結局は安価な日雇い労働者のむれになっている。伝統的な衣装は写真以上に華麗である。しかし、バーチュアル（実際の）でないものは雨が降つても洗濯の点からも大層不便でもある。フリーマーケットの古着はずつと清潔で便利である。

アペ村には、エイズも政治的対立も殺し合いさえもなんでもあつた。わけのわからないアメリカ人が村のトップに大きな家を建て、気に入ったボーイたちに身辺の世話をさせていたりする。そのうちに、揃いの टीーシャツを着たアメリカ人の一団がキャンディーをばら撒きながら行進したという。

村はどつちに向かつていくのか！

子どもたちの就学を支援する活動

一年の過半を村に入り浸っている H 氏との討論の結論は、新しい農業の定着と子どもたちの中学就学保障という課題に手をつけないかぎり村自体が

分解するのではないかということだった。

それから約五年間、都留文大を起点とする N・G・O グループはチェンライ市にドミトリ（寄宿舎）を営んで該当する村の子どもを就学させることができた。二〇〇三年、近隣に公設の中学が開設されたのを期に活動の一区切りをつけた。

国際交流におけるコーディネーターの意味、とくにその腐りやすさについて一言することが本稿当初の意図であつたが、いずれかの機会に。なお、最初に記したアメリカ人の S・O・S ばなしは詐話であつた。彼は村々に多くのガールフレンドと子どもをつくるのに成功したのみであつた。

しまだ えいじ・都留文科大学名誉教授



教育プロジェクトの活動報告を記した冊子

特集 1

学生・留学生たちの 居住生活

都留文科大学の際立った特色は、学生たちが日本中から集まり、その大部分（今日在籍者のほぼ八七％）が大学近辺の下宿・アパートで四年間を過ごす、ということにあります。かつては、学生たちと地元の大家さんとの交流は緊密なものだったようです。しかし近年は、都留においてもワンルーム型のアパートが主流となり、しかも都留市外の業者が流入しているとも言われています。学生たちどうしの居住における交流は乏しくなっており、また大部分の学生は都留市民と親しく接することなく四年間を過ごしているわけです。こうした孤立した生活を改善すれば緩和されるかも知れない、精神不安を抱えた学生も増加しています。

このような傾向にあって、共同下宿を営む地元大家さんも居て、また共同下宿の良さを楽しんでいる学生たちもいます。また、この十年ほど前から大学の留学生制度が拡充され、今では海外からの数十人の留学生が地元の市民に支えられながら生活するようになっています。

学生たちの居住生活を集集し、大学と地元社会との交流の課題を改めて考える契機にしたいと思います。

都留の学生アパート事情

松本孝巳

都留文科大學は市立大學ですが、地元の都留市出身の学生はごくわずかです。山梨県内出身者も少なく大半は県外出身の学生で占められています。また、都留市は山間部の街で交通の便が良くありません。このため、県内出身者を含めほとんどの学生は大學周辺の学生アパートで生活しています。私は熊本県の出身で一九六九年に入学し、大學生協の設立運動に関わったのが縁でそのまま大學生協で働いています

が、入学当時から三六年経った今も昔も、前記の特色は基本的に変わりません。

この三〇数年間で変わったことをいくつか挙げてみると、一つには「ワンルーム型」のアパートが増え、「共同型」のアパートが減っていることです。「ワンルーム型」とは部屋毎に台所・風呂・トイレが付いているアパートのことです。私が入学した当時はワンルーム型アパートは一軒も無く、部屋は個別で台所・風呂・トイレは共同という「共

同型」のアパートが普通でした。また、共同であっても風呂が付いているアパートは良い方でした。当時は都留に三軒の銭湯が在り、街の人と一緒に学生も銭湯通いをしていました。今思えば、銭湯は街の人との身近な交流の場の一つでした。内風呂が一般的となった今では街の人でも銭湯を利用しなくなり、泰安湯だけが趣を変えて残っています。

ワンルーム型アパートが最初に登場したのは一九八〇年頃ですが、学生の間でたいそう話題になりました。当時の部屋代の相場が七、八千円、百円単位の部屋代の値上げにも反対して大家さんと談判をくり返していた私たちは、三万円近くもする部屋代に「そんなところに住める学生がいるのか」と驚いたものです。しかし、その後、ワンルーム型アパートは時の流れに乗って年々増え続け、対称的に共同型アパートは減り続けていきました。そして、ワンルーム型アパートの増加と並行して、部屋代が年々上がっていきました。(ただし、最近ではワンルーム型アパートが建ち過ぎて学生数より部屋数が上回り、供給過多の状況で部屋代を値下げするところが多くなっています。)

大學生協が「下宿問題」小委員会を

設置し、学生の生活と権利を擁護する立場から学生アパートに関する諸問題への取り組みを開始したのは一九八六年のことで、ワンルーム型アパートの増加に押されて共同型アパートが減っていく傾向が強くなっていたころです。当初の委員会には「共同型アパートを守っていききたい」というつよい思いがありました。委員は私の他はすべて学生で年々入れ替わっています。先輩たちの思いを引き継いで活動しています。

現在の委員会の主な活動はパンフレット『新入生のための学生アパート案内』(創刊号/一九八七年)を作成・発行し、新入生にアパート探しの際に必要な情報を提供していくことです。が、学生の声を集約して大家さんに伝え、必要に応じて大家さんと交渉したり、大家さんからの相談にも応ずるなど、学生アパートに関する様々な問題に取り組んでいます。

変化の二つ目は、ワンルーム型アパートの増加とともに、不動産屋(宅建業者)の仲介が増えてきたことです。もともと都留の学生アパートの大家さんは地元の方がほとんどでした。私が学生の頃は不動産屋(宅建業者)の仲介など聞いたこともありません。

地元の大家さんの話では「初めは市や大學から頼まれて学生が住めるようにした」のだそうです。そのためか、土蔵の中を仕切って部屋を作ったり、離れを改造したりといった急ごしらえのアパートが多々ありました。なかには何とも不思議な作りの「忍者屋敷」と呼ばれていたアパートもありました。これらのアパートはワンルーム型アパートの増加とともに廃業を余儀なくされていきました。

もちろん本格的に学生アパートを建築し、経営されている大家さんも数多くいらっしゃいましたが、大學周辺には数件のアパートが建っていただけでした。アパートの多くは都留市駅から谷村駅周辺にかけてと谷村工業高校周辺、また十日市場駅周辺にかたまっていました。



ところが、大学周辺や大学バイパス沿いにワンルーム型アパートが建築され始めるとともに地元以外の大家さんが増え、不動産屋（宅建業者）の仲介が始まりました。また、ワンルーム型アパートへの入居を希望する学生が増えるに従い、共同型アパートを取り壊してワンルーム型アパートを新築し、これを機会に不動産屋へ仲介を依頼する大家さんも出てきました。さらに、ワンルーム型アパートが増える分だけ共同型アパートへの入居者が減り、共同型アパートの大家さんのなかから、何とか入居者を確保したいということで不動産屋へ仲介を依頼する方が出てきました。



変化の三つ目は、ワンルーム型アパートが増えるに伴い、大家さんと学生との交流、アパート内での学生間の交流が希薄になってきたことです。

私が入学して最初に入居したアパートは大原荘です。まだ建物は残っていますがすでに廃業しています。私の学生生活の最初のコンパは下宿コンパでした。次に県人会コンパ、クラスコンパ……と続きました。下宿コンパには当然、大家さんや家族も参加し、無礼講で親睦を深めました。大原荘に限らず、それぞれのアパートでコンパを

やったり、山登りに行ったり、大学祭に出し物をしたりと和気あいあいでした。大家さんのなかには、街のお祭りにご馳走を差し入れてくれたり、学生の誕生日を祝ってくれる方もいらっしゃいました。

受講申告の仕方や学生生活上の注意などもアパートの先輩たちが一年生を集めてやっていました。大学のオリエンテーションもあったはずですが、記憶に残っていません。

ところが、ワンルーム型アパートが増え、不動産屋の仲介が増えるに伴い、大家さんと学生との接点や交流が少なくなってきたようです。また、アパート内での学生間の交流も少なく、希薄になっています。ワンルーム型アパートに配達に行った際、当人が留守なので隣の部屋の学生に荷物を預かってもらおうとしたところ、「誰が住んでいるか知らない」と断られたことがあります。また、共同型アパートでも隣人と「顔を会わせるのはまれ」「ほとんど話もしない」というところもあります。

最近、うつ症の学生が多いと聞いています。右のような居住環境では、ますます閉じこもってしまうのではないかと心配です。

まつもと たかみ・都留文科大学生生活協同組合・「下宿問題」小委員会担当理事



参考資料：学生が住んでいる部屋の数（「下宿問題」小委員会作成資料より）

	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
「ワンルーム型」	2,146	2,199	2,196	2,145	2,184
「共同型」	558	518	431	414	399

賄い付き共同下宿 「輩」の誕生

「輩」に住む

小暮祐介

男子学生専用

大学のすぐ近くの建物のことですが、その前を通ると、しばしば玄関ホールに多くの学生たちが集まって賑やかそうにしているのが目に入るようになりました。そこは、以前は、大学の教職員組合の懇親会などでもよく使ったことのある料亭でした。その不思議な賑やかさが気になっていたのですが、そのうち、そこが賄い付きの共同下宿になったことを知りました。その名は「輩」。今は都留の学生たちも大部分がワンルーム型のアパートに住むようになってきているわけですから、新たな「賄い付き共同下宿」が繁盛しているということは興味深いことでした。そこで大家さんである東晏江^{あづまやえ}さんに話しを聞いてみると、学生たちは、みなで道志までハイキングしたり、山に登ったり、一階と二階とでチームを作ってソフトボール大会をやったりしているようです。「輩」の現在の「居住人」に、その生活を書いてもらいました。（編集部）



食堂の様子

春の都留は雪だった
都留に初めて来たその日は、雪が降っていました。着の身着のまま慌てて都留にやって来た僕は、とりあえず「輩」へと向かうことにしました。ところが、僕の部屋には何も届いていません！ この寒い夜をどうやって過ごそうか、途方に暮れていたそのとき、大家のおばあさんが僕に布団を貸してくれました。引越してきた初日に、こうして地元の人々の温かさに触れることができた僕は、幸せものだったのかもしれません。

ひとつ屋根の下の「輩」

「輩」では、毎年、新入生を迎えるにあたって、歓迎会を開きます。住人同士が自己紹介をし、酒を酌み交わすのです。文大には全国から学生がやっ

てくるわけで、新入生にはなにかと不安があります。しかし、同じ屋根の下で生活する先輩や同輩と知り合うことで、大学生活のスタートはとても楽しいものとなります。住人同士でボーリングをしたり、ソフトボールをしたり、二四時間ハイキング、なんてこともしました。

とはいえ、「輩」にも問題が無いわけではありません。共同で使用している廊下を、汚くしてしまうことも日常茶飯事です。食事についても、一部の人が不満が出ることもあります。それでも、この「輩」がもっている温かさが消えるわけではありません。

僕は、これからもっと、大家さんと学生の関係と、そこから始まる都留の人たちとのつながりを、親密にしていきたいと思うのです。



「輩」の玄関

大家さんと仲良し

一軒家の共同生活

本田深雪

「十日市場の一軒家が空いてるぞ」
二年前、地元の方のこんな一言から、共同アパートを飛び出して十日市場の一軒家へ移りました。敷金礼金無しの一ヶ月三万円の家賃。こんな素敵な物件はそうそう見つけれません。お金の問題だけではなく「おばあちゃんの家」の雰囲気」に惚れこんで、家を見学したその日に住むことを決めました。今年と同じ学年の友達と二人で住んでいます。

玄関をあけると土間があり、広い台所と五つの部屋、そして屋根の上につくられた日当たりの良いベランダ、川が流れる庭。そんな空間を好きに使えるなんて、これから先経験できないかもしれません。

さて、良いことばかり言ってもしかたありません。この家は四〇年前に建てられた古い家。大変なこともいくつかあります。汲み取り式のトイレ、お湯が出ない風呂、隣の家のくしゃみが



台所も広いので、さまざまな人が料理をつくりにやってくる。写真は宴会準備の様子（本田深雪さん撮影）



昔の玄関は、いまでは裏口となっている（本田深雪さん撮影）

聞こえる、外と寒さが変わらない（時には外にでた方が暖かい）、妖怪が住んでいる、などなど。この家の好きなところと同じく、挙げればきりがありません。けれど、大変なところも私にとっては魅力の一つです。

大家さんがすぐ向いに住んでいるせいか、気がつけば世間話に花がさいていたり、夕飯のおかずをお裾分けしてもらったり、とれたての野菜をいただいたり、とてもお世話になっています。この家に住んで何より嬉しいのは、「おかえり」と声をかけてもらえること、そして私もそういう言葉を言えること

です。試行錯誤、私たちなりの住み方でだんだんこの家と環境に馴染んできました。

この家は一〇年程前から学生が代々続けて住んできました。私たちは五代目の住人になります。大家さんの話のなかでは、伝説の数々が語られます。たとえば二〇人の大宴会が日夜繰り返られていたとか、知らないうちに住人が一人増えていたとか。同じ家でも住む人間によって性格が変わるようです。私たちが暮らした期間がこれからどう語られるかはわかりませんが、春から住んでくれる人たちが、この家でどんな伝説をつくってくれるのか楽しみです。

ほんだ みゆき・本学社会学科四年



タイムスリップできるトイレ（本田深雪さん撮影）

住まいの交流の場をつくる

work・waku都留のつる小屋づくり

岩倉里珠

「カツコイイ家に住みたい！」こんなエゴから、本当に、学生自身の手で空きアパートの改装・再生をやっています。

始まりは、私のひとつ上の先輩たちが履修していたまちづくりの授業でした。その授業で生徒一人一人が「自分のエゴから出発」するまちづくりプランを立て、それを是非実現させたい、という有志が集まってできたのが、work・waku都留（わくわく・つる）

というまちづくりサークルです。三つの企画を柱にはじまり、そのなかの一つがこの「空きアパート再生計画」でした。現在、サークル全体で約三〇名、アパート班の中心メンバーは六名で活動中です。

鉄筋三階建ての空きアパートの二、三階部分を、大家さんのご好意により幸運にも借りることができ、個人の部屋（三階部分）の他にみんなで料理したりくつろいだりできる共有スペース（二階部分）を備えた「コレクティブ住宅」を目指し、日々作業に励んでいます。

出来ることは極力自分たちでやっています。ただ、長く人を惹き付ける空間にしたいので、デザインは建築士さんに頼んでいて、もちろん専門的なこと、例えば電気・ガス・水道工事は地元業者さんに依頼していますが、その他の解体作業や製作、図面書き、材料発注・運搬などはすべて学生がやっ



海岸で拾ってきた石で土間うちをする（写真提供・岩倉里珠さん）

ています。建築学科ではないし、知識も経験もないので試行錯誤の繰り返しです。

学生が学校の片手間に遊び半分で作った家だと思われないう、できる限り細部にまでこだわって頑張っています。はじめたころはもっと簡単に出来ると思っていた、夏休み中に完成！なんて計画を立てたりもしましたが、素人の私たちに、改装作業は思った以上に難しく、進めていくうちにあれやこれやとトラブルも発生、また普段は学校があるためなかなか進められませんが、早く仕上がるに越したことはありません。焦ってやつつけ仕事になっ

てしまうよりも、私たちが卒業した後もずっと人が集まりたいと思ってくれ

る、そんな空間づくりを大事にしていきたいと思っています。

複数の人が同じ目標に向かっていて、だんだんと目指している空間に近づいていることが実感できた瞬間は本当に嬉しいものです。しかも作品が大きいだけに嬉しさは感動に近いものがあるし、その気持ちをみんなで共有できるのです。こういうところがこの活動の大きな魅力だと思います。作業の合間にみんなで作って食べるご飯も最高においしい！

近所の方も、作業の騒音などで少なからず迷惑していると思うのに暖かい目で見守ってくださり、本当に感謝しています。一人のエゴからはじまった活動ですが、空きアパートの再生をしていくことで、直接的にもまちの活性化につながり、地域の方々に恩返しができるのではないかなと思っています。

いわくら さとみ・本学社会学科二年

建築士とともに木材の買い出しにでかける
（写真提供・岩倉里珠さん）



共同下宿二代目の大家さんが語る

今は数少なくなった共同下宿（現在は風呂場を共同利用している）を営んでおられる杉田美司さん、利枝さん夫妻に、経験のひこまを語っていただきました。



杉田美司さん（いつくしみハイツ、慈寮の前にて）

—ある日の朝—

（学生）「おはようございます」

（夫）「おはよう」（妻）「おはようございます」

（妻）「明るく学校へ行きましたよ」

（夫）「若い人たちの挨拶は気持ちがいいものだね」

—新入生を迎える—

（夫）「先日、いつくしみハイツ、慈寮の学生さんたちみんなで『顔合わせ夕食会』をしたので、新入生も上級生も、知り合いになったからね。」

（妻）「先輩から学校のこと、ゼミのこと、大学への思っていることをいろいろ聞いて良かったって話していましたよ。一人の学生さんは、先輩と同じサークルへ入ったって。サッカー、野球、マンドリンクラブの人もあるね。いつかマンドリンクラブの人たちが七名も

いたことがあったね。」「新入生の人たちも自分の生活ができる自信がついたみたいですね。」

（夫）「ほんとうに良かったな」

—喜びを分かち合う—

（妻）「いつか教育実習に行ってきた、熱く自分の夢を話してくれた人ね、二次試験に受かりましたって、喜んで知らせにきてくれましたよ。」

（夫）「それはおめでとう、よく勉強したのだな。高校の教師か、良かったな。」

—格別にうれしいこと—

（妻）「あれ！こんにちは！M・Oさんね。久しぶりね。」

（卒業生）「こんにちは！僕は懐かしくて、学んだ学校と下宿を見せに奄美大島から新婚旅行を兼ねて来ました。大家さん、ぼくの彼女です、見てください。」

（夫婦の回想）「とっても似合いの二人でしたね」



（夫婦の回想）「この前はK・Mさんが訪ねてきてくれましたね。」

（卒業生）「大家さん、また来ました。女房の実家に行くのだけれども、御殿

場で降りて都留に来ました。ぼくの家族が増えました、見てください。」

（妻）「まあ、かわいい赤ちゃんね。きつと良い子に育ちますよ。」

（夫婦の回想）『また来ます』と言って帰っていったね」

—人のつながり—

（夫）『今度、私の教え子が受かり、そちらに行くことになりました。大家さんのところにお願います』と遠方より電話もあったな。」

（妻）「高校の同級生が上と下の部屋に入ったこともあったね」

（夫）「同じ高校の先輩、後輩が入ったこともあったな」

（妻）「長い間には、人とのつながりがたくさんありますね。」

—夫妻の思い—

多感な学生時代の若者たちと近くに居てことばを交わせること、その後も長い交流のもてることは、嬉しいかぎりです。学生さんたちに輝きのある明日がありますよう、祈っております。

（都留市十日市場「いつくしみハイツ、慈寮」）

文大生活の醍醐味

吉田晴彦



下宿でのコンパ（写真提供・吉田晴彦氏）

「今日は寒いな。鍋でもするか」「テストが終わったから打ち上げでもしようよ」等等、都留で「文大生」として過ごした日々、何かと理由をつけては下宿でたくさんの友人と飲み会を開いたものでした。社会人になった今でも、まるで昨日のこのように当時の楽しい飲み会のことを思い出します。

私は神奈川県湯河原の出身です。文大への入学が決まった時は、誰も知り合いのいない都留に住むことに不安もありました。とくに新しい友人ができるのだろうか？というのを最も気にかけていましたが、そんな不安は早くも入学式前に打ち消されました。下宿の大家さんが顔合わせの食事を開いて下さり、新入生同士の仲を取りもってくれたため、あつという間に友人ができたのです。

共同下宿は「寮」のような趣があり、自然と仲間意識も生まれるので、その後の生活のなかでも同学年だけでなく先輩や後輩、また学年の枠を越えてさまざまな人と知り合い親しくなりました。もしワンルーム暮らしをしていたなら、そういう人たちとは知り合う接点も無いか、もしくは挨拶程度の関係で終わっていたかも知れません。ここで培った人脈は私の財産の一部となっています。

ここ数年ワンルームアパートの人気に押されて懐かしい共同下宿がほとんど姿を消していると聞いて、文大の特色が色あせていくような気がして寂しく思います。

新築の部屋に住みたいとかプライバシーを大切にしたいといった理由が主なところだと思いますが、ごく普通のアパート暮らしは他の土地でも、あるいは卒業してからでも、いくらでもできます。

文大生活の醍醐味は、知り合った人々と一歩踏み込んだ人間関係を築くことにあると思いますが、それを助けてくれるのが共同下宿だと言えるのではないのでしょうか。

よしだ はるひこ・本学英文学科卒業生、神奈川県の高 school 教諭



下宿でのにぎやかな集まり（写真提供・吉田晴彦氏）



写真上・山梨県の文化祭に参加

写真下・留学生とのホームパーティーの様子

留学生と過ごして

小林文子

こばやし ふみこ・都留文科大学国際交流室専門員

私は若者が大好きです。夢があり、正義感があり、自分の思うことをハッキリ語れるパワーがあるからです。学生生活（留学生活）をサポートするこの仕事を通し、私は大きなエネルギーを彼らからもらいます。

とくに留学生との日々は刺激的です。ときには価値観の相違にびっくりし、当たり前だと思っていたことが完全否定されたりします。例えば…「フミさん、これ何？どうやって食べるの？」これはスーパーでパック詰め魚を見ての質問です。「フミさんのご両親はどこの国の人ですか？」これはご両親がベトナム人のカリフォルニア留学生からの質問です。「ボク、日本に居る間に結婚し

ます。そうしないと手続きが面倒なので…。」これは韓国と中国のカップルの会話です。

「ボクはアメリカで暮らしてます。でも韓国人なので徴兵のことが頭の隅にあります。」彼らは私が予期しない質問や相談をしてくれます。手料理でごまかし、私はほとんど聞き手になります。でもおしゃべりしてお腹が一杯になると皆、良い顔になります。

全く異なる環境の中で生活しながら、^{つまず}躓きながら、彼らはけな気に勉強しています。異国で文化も風習も違う人たちと毎日コミュニケーションをとっていかねばならないのです。留学生のほとんどが都留を去る日に言ってくれます。「ここで勉強

強できて良かったです。日本が好きでいられます。都留市は小さな田舎町だけど大きな物をもらいました。ありがとう。」私は「あら、お世辞が言えるようになった！」と言いながら、今度会うときにはどんな大人になっているか考えます。それが楽しみの一つです。

学生が集う町、留学生が住む町、都留市は本当に生きている町だと実感しています。

地元のおばさん、おじさんが無理せずできることをしてあげて、学生から沢山のエネルギーとパワーをもらうことのできる町。都留市で生まれ育ち、今老いつつある私は、年相応に未長く学生さんと楽しく関って行きたいと思っています。そうできたら最高に幸せです。



写真上・都留市東桂の宝鏡寺にて

写真下・夏祭りに参加（写真はいずれも小林文子さん提供）

市民に支えられる留学生たち

本学留学制度の歴史と私の期待

鳥居明雄

13

とりのい あきお・本学比較文化学科教員、国際交流室長

センター通信7号

本学には、現在、私費外国人留学生と交換留学生（中国湖南師範大学、米国カリフォルニア大学）、それに大学院留学生を合わせると、年間で数十人規模の外国人留学生在籍しています。留学生試験や交換留学制度の発足からすでに十年くらい経っていますが、年間数十人にふくらんできた留学生の真摯な勉強ぶりや活発な活動ぶりは、キャンパス内外にたいへん重要な刺激を与えています。当初からのねらいは十二分に果たし得ているものと観察され、留学生諸君をはじめとしてこれに携わる教職員、地域市民の地道で献身的な努力に心から敬服しています。

留学生の生活はキャンパス内での

勉強が中心ですが、しかし、キャンパス内外、とくに地域に溶け込む課外活動や地域交流がきわめて大切であることはいうまでもありません。さいわい、地域小学校で進行中の国際理解教育での交流活動を軸として、留学生の広範な地域交流活動には目を見張るものがあります。また、地域文化や地域社会にまつわるいろいろな活動にも活発に参加していますし、また、ホストファミリー制度も柔軟かつ適切に導入され、留学生と地域市民の交流は今や草の根のレベルで日常化しつつあります。このことは他大学の状況に照らしても特筆すべきことだと思っています。カリフォルニア大学留学生などは、本学の交流プログラムは世界一だ、な

どとややおおげさに感想を漏らしてもいるようです。

本学の留学生地域交流プログラムは、都留市近隣に生きる人々と小規模地域社会の特色をよく生かした、まさにオーダーメイドの活動内容として、内外から高い評価を受けています。これをモデルにして、たとえば都会の大規模大学とその地域にそのまま導入しようとしても、まったく実効は得られないと思っています。現在稼働中のプログラムは、都留市自治体のなかでこそ成り立つものであって、その意味でかけがえのないプログラムであり、また貴重な活動であると自認しています。

今後もなお各方面のご協力とご努力を広くお願いする次第です。

ホストファミリーとして留学生を迎える

小俣きみ江

私

たち家族が、ホストファミリーとして留学生を迎えようと決めたのは、高校二年生になる娘の生活に

で自己紹介をしました。発音もイントネーションもかまっていなくて、冷や汗ものでした。

少しでも変化を見い出すことができ、英会話への興味を強いものにできればいいという親心からでした。しかし、家族全員が前向きに賛成というわけではありませんでした。とくに、夫と息子は消極的でした。おそらく留学生とふれあうときに、英語を使わなければならないという状況におかれることがわかっていたからでしょう。もちろん私にもいくらかそんな気持ちもありましたが、それより留学生から学ぶ多くのことが私たち家族にとってプラスに働くのではないかという気持ちの方が強かったのです。

いよいよ留学生ローラとの交流が始まりました。私には、「できるだけ日本伝統的な行事や習慣などにふれさせてあげたい」という気持ちがありました。八月には、「岩殿のかがり火祭り」、「河口湖の湖上祭」などに連れ出しました。そのとき、興味をもってくれたことは、阿波踊りの行列や花火屋台、お好み焼きなど日本の文化や伝統だったのです。九月になって、十五夜のお団子作りに誘いました。私の実家の母から、お団子の作り方を教わりました。「こねる」「丸める」「耳たぶ

した。今考えると、できるだけ日本文化や習慣などを伝えようとした私たちの試みは、留学生にとって果たしてよかったのかどうか疑問です。しかし、留学生との交流を通して、私たち家族は、変化のある、刺激的で貴重な時間を過ごすことができたことは確かです。こ

んな経験も一つのきっかけとなり、娘も英語関係の大学に進み、今前向きに頑張っています。私たち家族がこのような機会に恵まれ、貴重な体験ができたことを留学生ローラや都留文科大関係の皆様に深く感謝いたします。

おまた きみえ・都留市市民、上野原小学校教諭

留学生を迎える歓迎パーティーには、私一人で参加しました。それまでに学生時代に学んだ英語を思い出し、英語での自己紹介を考えたり、名刺の準備をしたりしておきました。当日、留学生たちの日本語による自己紹介があったので、数十年ぶりの英語

い回しを伝えるのに苦労しました。なかでも心に残っているエピソードは、ローラの日本文学の宿題を英訳したときのことです。「渡し守」「渡し舟」など英・英和・古語辞典を使いながら調べ、伝えようとしたのですが、適切な日本語も分からず、四苦八苦しま



ステイ先の家族、チューターたちとさよならパーティー
(小俣満雄氏撮影)



山中湖にて (小俣えりかさん撮影)

市民との出会い

私の留学生活での戸惑いと発見

郭燦飛

都 留での五年間、本当に後悔がない、充実した有意義な毎日を送りました。

わたしは二〇〇〇年四月十七日に、交換留学生として来日しました。外国での初めての生活なので不安な気持ちのまま、二、三ヶ月の間はなかなか日本での生活にとけ込めませんでした。



旭小学校での交流（写真提供・郭燦飛さん）

せっかく日本に来たのだからこのままで終わらせたくはないと思い、その後できるだけ積極的にいろんな活動に取り組んで来ました。

まず日本の学生、とくに一年生たちはみんな恥ずかしがり屋さんみたいなので、なかなか自分たちから声を掛けてくれませんが、仲良くなるために、私の方から声をかけ、同級生たちも次第に私のことをサンヒサンヒ（燦飛）と友達のように呼び掛けてくれるようになりました。

学校ではみんなと仲良くできまして、その後は市民たちとの触れ合いの活動にも積極的に参加するようになりました。

都留市市民運動会に参加して、スポーツ競技をしながら、都留市の老若男女とコミュニケーションができて、スポーツには国境や年齢制限がないと感じました。

その後は、中国のことを子どもたちにも知ってもらうために、各小中学校の料理教室に行って、中国の文化、中国の料理などを子どもたちに教えました。子どもたちは中国のことにとっても興味津々で、国際友好交流というものは、お互いの異文化を理解する上で子どもの頃から行うべきだと感じました。

都留市の生

活では、年に一度の八朔祭りや学園祭にも積極的に参加しました。

九月一日の八朔祭りでは、屋台の上で太鼓をたたいたり、屋台を引っ張って町を回したりして、日本の伝統文化に触れながら市民との交流を一層深めました。一月の学園祭では、中国の水餃子・ゴマ団子・ワンタンなどを全部手作りして、みんなに召し上がっていただきました。毎年の反響はとても良かったです。学生や先生たち、町の住民たちみんなが美味しく食べている様子を見て、何よりも幸せでした。

外国での生活はいろいろ大変ですが、それを乗り越えて、お互いの文化



9月1日の八朔まつりにて（写真提供・郭燦飛さん）

を理解し合うのは国際友好親善の第一ステップであると思います。

山梨国際交流親善大使としての私は、これからも日中・アジアの友好のために市民との交流を続けていきたいと思っています。

かく さんひ・本学社会学科四年生